

【中学生の部 優秀賞】

小さな優しさがつなぐ未来

東中学校3年 金子 愛理

すべての人が安心して暮らせる社会。それは、誰もが願う理想のかたちだろう。私は、そんな社会を本気で目指したいと考えている。

そのためには、一人ひとりが「優しさ」を持ち、相手を思いやって生活することが必要だと感じる。

あなたは、公共交通機関で誰かに席を譲ったことがあるだろうか。もしそのとき、相手に冷たく断られたら、どんな気持ちになるだろう。「もう二度と譲らない」と思ってしまいかもしれない。けれど、「今回はたまたまうまくいかなかっただけ」と受け止め、また譲ろうとする人もいるはずだ。

私は、後者のような気持ちを大切にしたい。困っている人に手を差し伸べること。それこそが「優しさ」であり、その積み重ねが、誰もが安心して暮らせる社会へとつながっていくと信じている。

私がまだ幼かったころ、家族と一緒に電車に乗ったとき、席を譲ったことがある。優しさからというより、「席を譲る私は、なんだか少しだけ大人になれた気がした」からだった。「それができたらお姉さんになれる」と思っていたのだ。

そんな子どもらしい理由だったが、実際に席を譲ると、相手の方が「お姉ちゃん、優しいのね。ありがとう。」と笑顔で言ってくれた。「ありがとう」という何気ない言葉

がすごく嬉しくて、私もついに人の役に立つことができた、と胸の奥がポツとあたたかくなった。自分の中に、小さな光が灯ったような気がした。私はその笑顔を、今でも忘れられない。

たとえ動機が小さくても、自分の行動が誰かのためになる。私はそのとき、優しさを行動に移すことの大切さを学んだ。

最近では、インターネットで「席を譲ろうとしたらにらまれた」「大声で断られて恥ずかしかった」といった体験談を見かけることがある。そうした声を見て、「自分も嫌な思いをするかもしれない」と考え、行動をやめてしまう人もいるかもしれない。

けれど、私は思う。インターネットにあふれる声だけで判断せず、自分自身の目で見て、心で感じたことを大切にすること。それが本当の優しさへの第一歩なのではないか。

相手の感じ方は人それぞれで、同じ状況は二度とない。一度冷たく断られたからといって、次も同じになるとは限らない。「今回はうまくいかなかっただけ」と受け止め、また次に席を譲る。そんな心がけが、少しずつ社会を変えていく力になると私は信じている。

私が考える「本当の優しさ」とは、見返りを求めずにそっと行うものだ。だから私は、一度断られたとしても、席を譲ることをやめないだろう。

これからも私は、どんなときも優しさを忘れず、困っている人に手を差し伸べることを意識して生きていきたい。

もちろん、一人の力には限りがある。私ひとりが優しさを持っていても、社会全体がすぐに変わるわけではない。

だからこそ、今この文章を読んでいるあなたにも、小さ

な優しさを忘れずにいてほしい。あなたの一歩が、誰かの希望になるかもしれないから。

そうした優しさが少しずつ広がれば、きっと未来の社会は、今よりもっと豊かで、ぬくもりのある場所になると私は信じている。

【中学生の部 優秀賞】

支援をする人のために

東中学校2年 鶴見 柚月

いきなりですが、みなさんは六十年後支援を必要とするような暮らしをしている自分の姿を想像できますか？また、福祉と聞いて何を思い浮かべますか？

私は去年福祉学習で、高齢者福祉について学習しました。どの場所に体験に行っても、「高齢者の方は大変だから支援しないとな。」と強く思いました。

私には近くに住む祖父母がいます。二人とも明るくて優しく、私は二人が大好きです。ですが、祖父はあまり体が思う通りに動きません。また、去年がんにかかってしまいました。今は回復していますが、このようなことがあり、私は身近な人の福祉について考える機会が去年は多くありました。

ここからは福祉学習で学んだこと、祖父母と接していること、について分けていこうと思います。

まず、私達の学年は総合の学習として福祉について学習しました。私は高齢者福祉を行っていたので高齢者介護施設で働いている方の話を聞くことができました。その体験を通して、高齢者の方は大変な暮らしをしていて、そんな人々を支えてくれる施設だと知れました。また、私達はフィールドワークで現地の人の話を聞いたり、工夫されている点、改善点を探したりしました。そこでは改善点が見つからないくらい工夫がされていて、高齢者の方を考えると工夫してくださる施設の方は本当にすごいなと思いました。

ここまで長くなってしまいましたが、私は福祉体験を通して「高齢者の方は大変だな。」よりも「支援する人ってすごいな。」という思いが強かったです。

次に、先ほど言った通り私の祖父はあまり体が自由に動きません。でも私達の好きな料理を作ってくれます。そんな祖父を見ていて、祖父は元気であるものだと勝手に思っていました。だからこそ、祖父ががんになってしまった時はとてもショックでした。その時、私は初めて身近な人を支える立場になったのだと実感しました。その時、同じ支える立場として祖母のことにも目を向けられるようになりました。祖母は誰よりも不安で悲しいはずなのに、そんなことを感じさせないほど懸命に祖父を支えていました。でも祖母だって高齢者です。祖母は元気ですが、よく病院に通っています。そんな祖母が、安心できず、大変な思いをしている環境でいいのかと思いました。

私が福祉について思うことは、支援を必要とする人ももちろん大変な思いをしています、その支援をする人も色々な思いを抱いて、大変な思いをしているということを多くの人に知ってほしいのです。

そして、冒頭の問いですが、福祉と聞いてきっと皆さんは支援を必要とする人を思い浮かべたのではないですか？私も実際、福祉と聞いて支援を必要とする人を思い浮かべていました。私達は福祉学習で「支援を必要とする人が安心して暮らせるために」を考えてきました。でも、私はこれからの福祉の形として「支援をする人が安心して支援ができる環境」をつくるのが大切だと思います。これは、私がフィールドワークや身近で、支援をする人を見ていて一番これから実現してほしいと思ったことです。実際もち

ろん福祉とは「誰もが幸せになるために支援すること」だと思います。でも、私は福祉と聞いた時に、支援を必要とする人だけでなく、支援をする人も思い浮かぶようになってほしいです。

私はただの中学生なので、そのための社会を作ることはできません。でも、この考え方が少しでも広がって、「支援をする人が安心して支援できる環境」に少しずつなっていくといいなと思います。